



自傷と救命のはざま

茂野綾美

東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻／医師

病院の中で患者を待ち受けているだけでは救えない患者たちの対応に、救命救急センターの常勤医だった私は限界を感じていた。どれだけ必死に救済しても、身体的傷病の治療をしても、入院前となんら変わらない環境に患者を帰し、その後にもまた搬送されてくるということは、一度や二度ではなかった。私が書いた診療情報提供書が未開封のまま、熨斗のように患者と一緒に戻ってきたこともあった。生きて戻ってきてくれるなら、まだ良かった。

病院で提供される医療だけでは救えない人たちは、病院の〈前〉と〈後〉で、どう生きているのか。それを知りたくて、私は常勤医をやめて公衆衛生大学院の学生になった。そうして、夜な夜な繁華街の一角で、居場所なくさまよう若者たちと一緒に、何もせず、ただただ同じ時間を過ごしている。

「今」を生き延びようとする彼ら／彼女ら

夜の街に集まる若者たちがいる。

居場所なく公共空間をさまよい歩く彼らは、「秩序を乱すもの」として排除されがちな存在であり、健康でも安全でもないことが多い。繰り返される自傷行為は茶飯事であり、連日の過量内服、アームカットで心身ともに傷つくことで今日を生き延びている。

メジコン 50 錠を飲んで吐いているときの対応って何が正しいのだろうか、とぐったりしている若者の寝顔を見ながら考える。真っ白な腕に数えきれないアームカットの痕跡、安静時振戦。脈も呼吸も早い

けれど、病院には行きたくないらしい。仕方がないから、隣に腰掛けて様子を見る。搬送される側としての勤務経験は 10 年近くあるので、ひとたび搬送されてしまえばその後の流れがどうなるか、は頭の中では至極明らかである。ルート確保して、採血して、補液して、入院させて、覚醒したら「もうやらないでね」という口約束をして、精神科への診療情報提供書（初療医の免罪符）を持たせて、退院。

救命救急センターにいと、彼ら／彼女らのような患者に対する感情は「またかよー」と「めんどろだなー」の合算で、優しくなれないことが多い。「いつ・何を・どのくらい（薬を飲んだか）」は治療上必要だから聞き出すけれど、身体的な治療に必須の情報ではない「どうして飲んだのか」とか「何がつらかったのか（つらいのか）」を積極的に聞くかどうかは、そのときの医療者の気分次第である。

救急医時代、自傷行為による患者を数え切れないくらい相手にしてきたけれど、誰にも寄り添っていなかったのかもしれない、と思う。必要なものは点滴でも入院でもなかったのかもしれない。白衣が邪魔をしていたのか、白衣を着ていた私の心持ちが邪魔をしていたのか、それとも白衣を脱いだとて変わらない何かがあるのか。

点滴も入院もしなかったけれど、話をして、少し眠って、水を飲んで、彼女は夜の街に帰って行った。

診療者目線への囚われ

この街で若者たちと話していると、その話の内容に「え、ほんと？」と思うことがよくある。

私が想像できる範疇を大きく超えた壮絶な虐待体験だったり、リアルな身の危険（というかもはや犯罪）だったり、私の生きてきた世界線では到底起こり得ないようなことを、自身の経験として語る子た

〈編集室より〉あなたの「声」をお待ちしています。掲載記事に対する感想／著者への手紙／雑誌への意見・提案・取り上げてほしいテーマ・情報提供／「こんな経験をした」「読者の皆さんはどう思う？」など、なんでもOK。掲載分には医学書院特製図書カードを進呈します。実名掲載が基本ですが、匿名の場合はその旨を明記ください。

【投稿先】 E-mail : seikan@igaku-shoin.co.jp

ちと出会うことがある。

私自身は救急医として働く中で、当然のことながら患者の話は「真実」として扱ってきた。いつから胸が痛くなったかとか、それはどういう痛みなのかとか、冷汗があったかとか、嘔吐したかとか、そういう「患者の話」の要素ひとつひとつは診断においても治療においても重要な情報だ。ただし、これらの断片ひとつひとつはあくまで要素として扱われる。救急医療の現場では、ストーリーを描くのは医者の仕事で、患者の仕事ではないことも多い。説明可能で、再現性のあるストーリーを、「患者のために医者が描く」ことも多くあるのだ。

病院を離れても、私が若者たちと向き合うスタンスは、病院の中にいたときと同じだったのだろう。医師－患者関係ではなく、ひとりの人間として向き合いたいなどと言っていたけれど、結局診療者目線から抜け出せていなかったのだろうな、と。まさにミシェル・フーコーの言う medical gaze の罫、である。

彼ら／彼女らと関わるようになって最初の頃は、これまでの自分の意識や認識とのギャップに悩んだけど、そのうち「嘘でも本当でもどちらでもいいか」と思うようになった。話の内容は真実ではないかもしれない。でもその子がそのとき、その場所で、その言葉で語ったことは、事実。それで良いのではないかな、と自分なりに納得して話を聞いていた。

嘘と分かって聞く

そんなある日、「ああ、これは絶対に嘘だ」と思わされてしまうようなエピソードが出てきた。その前に聞いた話とどうしても前後関係が合わない内容だった。

「え、でもこの間はこう言っていたじゃない」とその場で確認したり修正したりすることももちろんで

きただろうけれど、とりあえずその場は聞き流した。「そうだったんだね」「大変だったね」「話してくれてありがとう」とだけ応じて。そうしたら彼女は「話せて良かった！ すっきりした!!」と言って、夜の街に帰っていった。

彼女が私に語った話が本当ならば然るべきところに通報・通告しなければいけない内容だったから、書類上で答え合わせをする展開になってしまった。

そうしたら、やっぱり嘘だった。ついでに、芋づる式に彼女の他の話も嘘だったことが分かってしまった。

「やっぱり嘘かー」という気持ちが6割くらい、あとの4割はなんだかちょっと残念なような、さみしいような気持ち。でも、不思議と裏切られたような感じもなく、本人に事実確認をしたい欲求もわいてこなかった。

その後も、私は彼女の話の聞き続けている。嘘だと分かって、騙されたふりをし続けている。それは誠実ではないのだろうか、とまた悩む。でも、私が騙されたふりをして、信じているふりをして、「大変だったんだね」「話してくれてありがとう」ということで彼女の命が1日のびるなら、いくらでも騙され続けよう、と今は思う。

寄り添うということは、何もしないことに耐えられるかどうかなのだろうか、と思うことがある。スマホをいじるわけでもなく、パソコンを開くわけでもなく、声をかけるわけでもなく、かけられるわけでもなく。あなたと私が、ただそこに、いる。声をかけられればそれに応答する用意はできている、そういう状態のことを「寄り添う」というのだろうか。

今日も私は、自分に試されている。かつての私には救えなかった人が、今の私に救えるか、と。

精

※本稿はnoteに書いたものを再構成して作成したもの